理解チェックへの応答に用いられる「てゆうか」の相互行為的働き

An Interactional Work of "*Tte Yuu Ka*" in Responses to Understanding Check

中馬　隼人

CHUMAN, Hayato

摘要

This paper investigates how *tte yuu ka* is used in response to understanding check, which is one of the techniques for other-initiated repair. *Tte yuu ka* is often used as a repair preface in self-repair to indicate that the repair solution is better than the trouble source without rejecting the latter (Hayashi, Hosoda, & Morimoto, 2019). To understanding check, responses such as confirmation or correction are relevant. Some linguistic tokens are used for confirmation to understanding check. For example, in Japanese, *un* and *so* are chosen depending on interactional achievements (Kushida, 2011). When the understanding check is incorrect, the recipient of the utterance corrects it. However, direct other-correction should be avoided (Schegloff, Jefferson, & Sacks, 1977), which is why turn design of other-correction is mitigated, such as with adding *I think*. In talk-in-interaction in Japanese, *tte yuu ka* is used to respond to understanding check as a mitigated other-correction. This paper describes and analyzes two different workings of this practice. The first one is as follows: *tte yuu ka* is used when there is too fine a line to determine with confidence whether the other party's understanding check is correct or incorrect, and thus, the speaker responds while indicating that they are not wrong about the understanding check although the speaker did not intend this initially. The second one is as follows: even when the other party's understanding check is incorrect, *tte yuu ka* is used to foreshadow an explanation with some complexity without directly correcting it. The results of the present analysis suggest the following two points. First, a diversity of interactions is addressed by differences in the construction of utterances in the portion containing the response portion to questions. While previous analytic studies of conversation have revealed various relationships between interactions and turn-initial lexical tokens at the beginning of utterances, this paper could be considered one attempt to do so. Second, regarding the diversity of ways people respond to understanding checks, some attention has been paid to the types of affirmative responses to understanding checks (Kushida, 2011); however, less attention has been paid to how responses other than affirmative ones are made. This paper serves as a starting point to shed more light on various aspects of responses to understanding checks. The data comes from several corpora of talk-in-interaction in Japanese.

キーワード：*会話分析　理解チェック　修復　てゆうか　応答*
Keywords: Conversation Analysis, Understanding Check, Repair, Tte yuu ka, Responses

１．はじめに

我々は、日常会話において生じる発話の産出・聞き取り・理解にかかわるトラブルが生じた際の対処法を持ち、会話分析(Conversation Analysis)の分野では、このことを「修復(repair)」と呼ぶ (Schegloff, Jefferson, & Sacks, 1977)。修復の過程は、トラブルがあることをマークする段階である「修復開始」と、トラブルを解決する段階である「修復実行」に区別できる。さらに、修復開始および修復実行が、どの会話参与者によってなされるのかという観点からも区別される。たとえば、(1)のようなやりとりを見てみよう。

(1)　A:　この映画やばかったよ
　　B:　やばいって良かったってこと?　【修復開始】
　　A:　そうそう　【修復実行】

このやりとりにおいて、B は A の発話「この映画やばかったよ」の「やばい」の意味が、どういう意味なのかが理解できないトラブルに直面し、それについての自らの理解の候補を提示する形で修復を開始する。それに対して、A が「そうそう」と B の理解が正しいことを承認し、B の理解のトラブルを解消するという修復の実行を行っている。B の理解のトラブルの原因となった A の発話における「やばい」が、「トラブル源」となり、トラブル源を含む発話を行った A は「自己」、トラブル源を含む発話者以外の参与者である B は「他者」として区別される。このやりとりを整理すると、トラブル源を含む発話者以外の B（他者）が修復を開始し、トラブル源を含む発話者である A（自己）が修復を実行している。つまり、他者開始・自己実行の修復連鎖の例である。

(1)のやりとりにおける修復開始のやり方は、理解のトラブルに直面した際に、自らの理解が正しいかどうかを相手に確認するという形でなされており、「理解チェック(understanding check)」（または「理解候補の提示」）と呼ばれる（串田・平本・林，2017 など）。理解チェックによる修復開始がなされた後の位置では、（上記の例のように）それが正しいという確認が与えられたり、反対にその理解チェックの訂正がなされることがある(Sidnell, 2010: 132-133)。

本稿では、修復実行の 1 つである、理解チェックに対する応答が特定の言語形式を伴って産出された場合に、どのような相互行為的な問題に対処しているのかについて考えたい。具体的には、「てゆうか（とゆうか・ていうか・というか・てか等。以下便宜上、全て「てゆうか」と表記する）」が、理解チェックに対する応答に用いられるケースについて分析する。たとえば、(2)のようなケースが該当する（CEJC は、「日常会話コーパス」の略称。詳しくは 3 節を参照）。

(2) [CEJC_T014_018_65:06] ((お菓子作りが得意な杉山が吉田とシフォンケーキ作りをしている場面。吉田は、お菓子作り初心者であり、時々杉山に作り方のポイントを尋ねている。断片の直前では、レシピ本を見ていた吉田が、ココナッツオイルを使ったシフォンケーキのページを見つけ、それに対して杉山が以前立ち読みした本で見た情報を提示している。))
（トランスクリプト内の「→」は、本稿がターゲットとする「てゆうか」を含む発話を指す。）

```
01  杉山:          なん(.)なんだっけな ココナッツオイル作る(.)[使うと: (0.6)
02  吉田:                                                     [うん.うん
03  杉山:          立ち読みした本に:,[書いてあったんですけど:,
04  吉田:                            [うん
05  杉山:          あな- 泡が潰れやすくなるって書いてたのかな.
06  吉田:          .h 膨らみにくいってこと? (0.8)なんですか?
07                 (0.6)
08  杉山:  →       う::ん (.) 膨らみにくい>ってゆうか::,< 混ぜた-さっき:
09                 メレンゲ[混ぜた時の泡が:,](0.4)潰れやすい¿
10  吉田:                  [おん おん うん. ]
```

01, 03, 05 行目で杉山が立ち読みした本に、ココナッツオイルを使ってシフォンケーキを作ろうとすると、「泡が潰れやすくなる」と書いてあったと述べる。それに対して、06 行目で吉田は、「泡が潰れやすくなる」が意味することは、「（シフォンケーキの生地が）膨らみにくい」ということなのかを確認する理解チェックの修復開始を 06 行目で行う。その後、08 行目で杉山は、「う::ん」と言い、06 行目で吉田が発した「膨らみにくい」を繰り返し、「ってゆうか」を付加し、「メレンゲ混ぜた時の泡が潰れやすい」と応答することで修復を実行している。このやりとりで注目したいのは、理解チェックの修復開始がなされた後の位置で修復実行をする際に、「てゆうか」という言語形式がなぜ用いられるのかということである。会話参与者たちは、「てゆうか」を用いて理解チェックの修復開始に応答することで、どのようなことを成し遂げているのか、日常の自然会話のデータをもとに、会話分析 (Schegloff, 2007 など) の手法を用いて分析を行う。次節では、本稿で注目する理解チェックの修復開始への応答（修復実行）および「てゆうか」についての先行研究について概観する。

２．背景

２．1．修復連鎖における修復実行の発話デザイン

他者開始・自己実行の修復連鎖における修復開始のやり方については、特にその発話デザイ

ンを中心に多くのことが明らかになりつつある（cf. Sidnell, 2010; 串田・平本・林, 2017）。一方で、修復実行のやり方については、修復開始と比べると研究があまり進んでおらず、明らかになっていないことも多い。ここでは日本語会話における、特定の言語形式を用いた修復実行のやり方について論じた Kushida (2011) および中馬 (2019) について述べる。

Kushida (2011) は、理解チェック（理解候補の提示）の修復開始に対して「うん」タイプの応答と「そう」タイプの応答が用いられることに注目し、その違いについて分析した。例えば、「うん」タイプの応答が用いられるケースとして、(3)を分析している。

(3) Kushida (2011: 2721) (一部表記を改変)
((マキとサオリがマキのアパートでピザを食べており、サオリの目の前にあるピザを指さして、01 行目の発話を産出している。))

01 マキ: あたしも焦げてるの欲しい.
02 サオリ: これ?
03 マキ: → うん.

02 行目でサオリは、01 行目のマキの発話における「焦げてるの」が何を指しているのかについての理解チェックを行っている。03 行目のマキの発話は理解チェックに対する応答であり、「うん」を用いることで 02 行目のサオリの理解が正しいことをシンプルに承認している。一方で、「そう」が用いられるケースとして、(4)を分析している。

(4) Kushida (2011: 2726-2727) (一部表記を改変)
((大学生のシノダ(S)とカワシマ(K)による会話。シノダは最近録音機能付きの MD プレイヤーを購入したが、それに対してカワシマがこの種の MD プレイヤーが必要かどうかについて疑問を呈する。シノダは、確かに録音機能は使っていないが、購入した MD プレイヤーには「外部端子」が付いており、それが必要なために購入したという自身の正当性を主張する。))

01 S: <ろくおん > はあんま使ってないけどな:,
02 (0.2)
03 K: おん.
04 S: >゜ちゃう゜< 俺のはその(0.2)がいぶ↑ たんしが
05 欲しかってんや::ん. >だか<再生の専用でも
06 付いとったら良かって[んけどな.
07 O: [あ::あ.

08 K: 外部端子って この あの なんか
09 オーディオと繋げるとか[そうゆう] やつ::?
10 S: → [そうそう.]

08, 09 行目のカワシマの発話は、04-06 行目のシノダの発話における「外部端子」をトラブル源とする、理解チェックの質問である。つまり、カワシマは「外部端子」のことを「オーディオと繋げるやつ」という別の表現に置き換えることで、自分の理解が正しいかどうかを相手に尋ねている。それに対する応答として、10 行目で S は「そうそう」という「そう」タイプの応答を産出している。Kushida によると、(3)の「うん」タイプの応答が見られるケースとは異なり、(4)のケースは、04 行目で「その」というフィラーや、0.2 秒の短い間が観察されるため、シノダが「外部端子」という言葉の選択にトラブルがあると分析することができる。このことから、理解チェックへの「そう」タイプの応答は、何らかの言葉の選択についてのトラブルが生じた際に、それをより分かりやすい形で提示するという受け手からの援助があることを認める方法になっているという。このように Kushida は、理解チェックに対する応答にどのような言語形式が用いられるかによって、対処する相互行為的文脈が異なることを明らかにした。

また中馬(2019)は、他者修復開始に対して、修復実行を行う際に「だから」が用いられる現象に注目し、その使用について明らかにしている。たとえば、(5)のやりとりを分析している。

(5) [Callfriend4608_00:14]（串田・平本・林, 2017: 193）
((ケイタとシュンはアメリカの大学院に通っており、ケイタが近況について話している。))

01 ケイタ: 研究室が終わったからさ :.
02 (0.4)
03 ケイタ: [んで :]
04 シュン: [終わっ]たって:?
05 ケイタ: → あ だから(0.3)9 月のコンプリの(.)勉強に入るって
06 こと?
07 シュン: あ本当:.

01 行目でケイタが自らの近況の中で「研究室が終わった」という、理解されづらい発話を産出し、それに対して 04 行目でシュンが修復を開始する。その後、ケイタは 05 行目で「だから」を用いて「9 月のコンプリの勉強に入ると言い換えることで修復を実行している（「コンプリ」とはアメリカの大学院における「コンプリヘンシブ試験」のことを指し、学位論文審査の前に受ける必要がある。「研究室が終わる」ということは、研究室でやるべきことが終わり、学位取

得のための次へのプロセスとして、9 月に実施予定のコンプリの勉強に移るということをケイタは報告していると考えられる)。修復実行の位置で用いられる「だから」は、修復を開始した参与者も、同様の知識を持っていてよいはずだというスタンスを示すことができ、それによりこの場で起こったトラブルが修復開始者の責任にあることを表示することが明らかになった。

これらの研究が示したように、修復実行の発話は用いられる言語形式により、様々な相互行為的な働きを持ちうる。本稿で注目する「てゆうか」についても、理解チェック（修復開始）に対する応答（修復実行）に繰り返し用いられる。では、次に「てゆうか」自体についてどのような研究がなされてきたのかを見てみよう。

２．２.「てゆうか」

「てゆうか」という形式は、引用標識である「(っ)て」、動詞の「ゆう(言う)」、疑問（「A ですか?」）もしくは選択（「A か B」）の助詞の「か」から成り立っている。「てゆうか」についての研究は、多くの蓄積があるが（吉澤, 2003; メイナード, 2004; 林, 2007; マグロイン, 2007; Laury & Okamoto, 2011; 原田, 2015 など)、ここでは、会話分析的研究である若松・細田 (2003) と、Hayashi, Hosoda & Morimoto (2019) を取り上げる。

まず若松・細田 (2003) は、「X ていうか X'」という形式は、「先行する自分や他者の発言との間に距離をおき、あたかもその発言を第三者である誰かが行ったように聞こえさせながら、なおかつ、その後にもう一つの可能性となる要素が続く(p.32)」という意味を持っているため、「もう 1 つの可能性となる要素」に相当する「X'」が、先行発話を修正したり、訂正したりするために用いられていることを指摘している。たとえば、「合宿ってのは OB てか OG はくるの?」のような、自分の発話内における要素 X を別の要素 X'に置き換えるケースや、相手の発話における要素 X を X'に置き換えるケースなどを例に挙げ、「てゆうか」を「修復を先導する要素(repair initiator)」として位置づけている。

次に、Hayashi, Hosoda & Morimoto (2019)は、自己開始・自己実行の修復で用いられる修復の前置き(repair preface)としての「てゆうか」について分析している。たとえば、「担当の人::ってゆうか上司の人が…」のようなケースである。Hayashi らは、「X じゃなくて Y」のようにトラブル源を完全に否定せずに、より良い形式としての Y を提示することで修復実行を行うことを「てゆうか」が予示することを指摘している。

これらの研究に共通していることは、「X てゆうか Y」における X は、完全な誤りであるとは扱われていないという点である。本稿では、理解チェックの質問に対する応答の位置で用いられる「てゆうか」に的を絞って分析を進めるが、先行研究において明らかにされた「X てゆうか Y」における「X」は完全な誤りとしては扱わないという特性が大きく関連していると考えられる。

２．３．なぜ理解チェックへの応答に用いられる「てゆうか」に注目するのか

2.1 で説明したように、修復の実行にどのような発話形式で産出され、それがどのような相互行為的働きを持つのかについては明らかになっていないことが多い。また、2.2 で挙げた会話上の様々な文脈において用いられる「てゆうか」が、理解チェックへの応答においても繰り返し用いられるということは、相互行為上の記述すべき実践の一つであると言える。

また、「てゆうか」を用いた理解チェックへの応答は、Kushida(2011)における「うん」「そう」のような肯定の応答ではないという点も注目したい点である。理解チェックは、ある発話の受け手の理解が正しいかどうかを尋ねるものであり、それが全く正しいとは言えない状況のときに、「てゆうか」が用いられている。では、具体的にどのような相互行為的な働きがあるのだろうか。3 節では、本研究に用いるデータについて概観する。

３．データ

本研究で分析対象としたのは、国立国語研究所が公開している日常会話コーパス（小磯ほか, 2022）の対面会話の録画データ（約 20 時間）および、Talkbank(MacWhinney & Wagner, 2010)内で公開されている Callfriend Japanese Corpus（アメリカに住む日本語母語話者同士の会話）の電話会話の録音データ（約 3 時間）の合計約 23 時間の自然会話のデータである。これらのデータから、「てゆうか」が用いられる発話は 239 例収集された。そのうち、「てゆうか」が相手の発話（もしくは発話の一部）に対する応答的発話として用いられているケースは、32 例あった。さらにその中から理解チェックの応答に「てゆうか」が用いられるケースが 21 例あり、詳細な分析対象とした。書き起こしの記号については、串田・平本・林 (2017) に準じる。

４．データ分析

本稿で注目する現象は、次のような連鎖的特徴を持つ。

1　A　トラブル源を含む発話
2　B　先行発話に対する理解チェックの質問（要素 X が含まれる）　【修復開始】
3　A　理解チェックの質問に対する応答（要素 X+「てゆうか」の形式）【修復実行】

まず 1 つ目は、理解のトラブルの原因となる要素であるトラブル源が含まれる発話である。たとえば、発話のある要素の意味が分からない、もしくは述べられるべき要素が述べられていないといった、発話の受け手に理解のトラブルを生じさせる源となる要素がトラブル源である。そのトラブル源によって生じた理解のトラブルを解消するために、質問の形式を使うことで自分の理解のチェックを行うのが 2 つ目の発話である。たとえば、トラブル源を言い換えたり、述べられなかった要素を提示することなどが具体的な方法として挙げられる。そして 3 つ目が、

それに対する応答だが、本稿では「てゆうか」を伴う形で応答するケースに注目する（この発話形式の多くが X を繰り返すケースだが X を繰り返さないケースも存在する）。この種の方法が、どのような相互行為上の課題を解決するのかについて分析する。具体的には、4.1 で是でも非でもない応答に用いられる「てゆうか」についての分析、4.2 で弱い訂正に用いられる「てゆうか」についての分析、4.3 では「てゆうか」以外の理解チェックへの応答との比較を行う。

４．１．是でも非でもない応答に用いられる「てゆうか」

先行研究でも述べられているように、「X てゆうか Y」は、X は完全な誤りとは言えないが、それよりも良い選択肢としての Y を提示するものである。理解チェックに対する応答での「てゆうか」は、「はい」でも「いいえ」でもない、つまりある参与者が提示した理解チェックが正しいわけでも間違っているわけでもない微妙なものである場合に用いられることが分かった。次の会話の断片は、同じ会社の同期である W と Y による電話会話である。断片の開始部分は、直前まで 2 人が話していた会社の人事異動の話題がある程度の終わりを迎えたところである。

(6) [Callfriend4164_10:48]

```
01  W:        .hhh そうか:.
02  Y:        うんうん.
03            (1.5)
04  W:        .hhh[う:んそのぐらいかな:.
05  Y:            [そうそう.
06  Y:        あと同期の話とか- >ああああ y-<(.)°°(で)°° 異動の話は:そんな
07            とこ[で(  )
08  W:            [同期の異動の話?
09            (0.5)
10  Y:  →     あ::っ>ていうかまぁ<異動も含めて:.
```

このやりとりにおいて、06 行目の Y の発話全体がトラブル源となっている。まず Y は「あと」という追加の要素を用いることで、それまで行っていた人事異動の話に何かを付けたそうとしていることが分かるが、その後「あああ」と発話を中断する形で、「異動の話はそんなとこで」と、それまでに 2 人が話してきた話題の総括をするようなコメントへ発話の流れを大きく変更している。つまり、06 行目の Y の発話の組み立ては、次の会話トピックへの移行（「同期の話」）と、それまでの会話トピック（「異動の話」）の総括を不安定な発話形式で行おうとしているものであるため、その発話の受け手である W に対して理解のトラブルを生じさせる可能性が十分にあると言える。

それに対して、08 行目で W が理解チェックのための質問を Y に対して行う。この理解チェックは、06 行目の Y の発話における「同期の話」と「異動の話」を組み合わせたものになっているが、Y の発話の（不安定な）組み立てから考えると、異なる 2 つの要素（つまり、これからの会話のトピックである「同期の話」と、これまでの会話のトピックである「異動の話」）を組み合わせることで提示した W の理解は、正しいとは言えない。

しかしながら、10 行目の Y の応答は、「あ::っ>ていうかまぁ<異動も含めて:.」というものである。まず「っていうか」に注目しよう。これは、08 行目の W の「同期の異動の話?」という発話を、より良い形へ置き換えようとすることを予示していると理解可能である。具体的に、Y は「異動も含めて」という形への置き換えを行っているわけだが、このことから、Y が言う「同期の話」には、「同期の異動の話も含めることもできる」と認識していることが分かる。

ただし、元々Y が提示した発話はそのような意図では無かったということをディスプレイしていることが、「あ::っ」と「まぁ」の部分から理解可能である。まず「あ::っ」について言えば、そこで何らかの認識の変化が起こったことを示す言語トークンを用いており（Heritage, 1984）、W が 08 行目で行った理解チェックと Y が提示した 06 行目の発話の間に認識のズレが生じていることを示唆する。さらに、「まぁ」について言えば、隣接対の第二成分（ここでは理解チェックに対する応答）で用いることで、第一成分（ここでは理解チェックの質問）に対して何らかの問題を孕んでいることを理解しつつも、第二成分を産出していることが分かる（高木・森田, 2022）。これらのことから、Y の理解チェックは正しいとは言えないという意味で問題があるが、結果として大きな問題ではないことを示していると言えよう。つまり、Y は「っていうか（てゆうか）」を用いることで、「同期の異動の話?」という 06 行目の W の理解チェックに対して、是か否かという二者択一の応答ではない別の選択肢としての応答、さらに詳しく言えば、相手の理解チェックに何らかの問題があることを認めつつも、さほど大きな問題ではないという認識を示す応答を行っていると分析できる。

次の断片(7)も、理解チェックに対する応答が二者択一とは言えないような場合に「てゆうか」が用いられるケースである。

(7) [Callfriend1684_26:42] ((キョウコとマユミによる電話会話。マユミはニューヨーク在住。キョウコはかつてニューヨークに住んでいたが、今はダラスに住んでいる。二人は久しぶりに会いたいという話をしている))

```
01  マユミ:        ちょっとオフシーズンに_ (0.5) <会おうよ>
02                 (0.3)
03  キョウコ:      [(      )
04  マユミ:        [でもどっかに行く予定は無いの?=カルフォルニアとか.
```

05 (0.5)
06 キョウコ: 今年の- しょ- 正月?=
07 マユミ: → =>いや<今年ってかまあいつでもいいんだけどさ

01 行目で、マユミが（おそらく）仕事のオフシーズンに会おうという提案をキョウコに行っている。その後、04 行目でマユミは、キョウコはどこかに行く予定が入っているかどうかについて質問をしている。会話の流れ上、おそらくオフシーズンの予定を聞いていると思われる。それは、04 行目のマユミの発話は、「でも」で開始されており、先行する発話との何らかの繋がりを感じられるからである（おそらく、マユミは遊ぶ提案をしたはいいが、キョウコは既に予定が入っているかもしれないということに配慮しているということを示しているように聞こえる）。その後、06 行目でキョウコは、「今年の- しょ- 正月?」と、04 行目のマユミの質問において述べられなかった時間的要素について理解のトラブルに直面しており、理解チェックの質問を行っている。

その後、07 行目でマユミは理解チェックへの応答をしているが、このとき「てゆうか（ってか）Y」形式の発話が用いられている。まず否定を示す「いや」を発話冒頭に配置することにより、マユミがキョウコの予定について尋ねた 04 行目の質問は、正月のことについて述べていたわけではないことが示唆される。ただし否定辞を用いているが、マユミは「正月ではない」ということを主張しているのではない。マユミは「いつでもいい」と述べているように、「正月」も自分が行った 04 行目の質問に含まれうると認識しており、より広い意味合いで尋ねていたことを示している。このことは、隣接対の第一成分（ここでは理解チェックの質問）に対して何らかの問題が孕んでいることを示しつつ第二成分（ここでは理解チェックに対する応答）を産出される「まあ」（高木・森田, 2022）が用いられていることからも、理解可能であると言える。つまり、マユミはキョウコの理解候補 X（「正月」）を不適切ではありつつも、完全な誤りとしては扱っておらず、X を含むより広い範囲となる Y（「いつでもいいんだけどさ」）を提示している。

４．２．弱い訂正に用いられる「てゆうか」

次に検討したいのは、4.1 のように理解チェックが正しいとも正しくないとも言えないというよりも、むしろ明らかに間違っている際に、「てゆうか」を伴う応答がなされるケースである。まず(8)の断片を見てみよう。

(8) [CEJC_T005_006_10:52] ((長谷川と永井とまみこは、キャンプの計画を立てている。そこでみんなでホットサンドを作ることを長谷川が提案し、永井とまみこに却下される。それに対して長谷川が、01 行目でホットサンドを作る機械を持っていけばいいのではないかと言い、自分

の主張を続ける。))

01　長谷川:　　[えでも でも >でも<うちにある]うちにあるホットサンドのさ:=
02　永井:　　[なんなら なんなら これこの朝-]
03　長谷川:　　=なんか機械持っていけばいいんじゃないの. こうやって.
04　　(0.3)
05　長谷川:　　こういうやつ.= ((両手を使って上下でパンを挟む動き))
06　永井:　　=電気のやつですか?
07　長谷川:　　うん
08　　(0.6)
09　長谷川:　→　[電気ってゆうか:,][>電気って<こうやってやって:,((05行目と同じ動き))
10　永井:　　[電源 電源は?　　]
11　まみこ:　　[電気じゃない=こうやって挟んでガス焼いて-
12　長谷川:　　ガスコンロでやるやつ.

01, 03行目で長谷川は、ホットサンドを作る機械を持っていけばいいのではないかと主張する。その際に、05行目で「こういうやつ」と言い、ホットサンドを作る機械をジェスチャーによって描写する。それに対して、06行目で永井は「電気のやつですか?」という理解チェックの質問を行う。その後、長谷川は07行目でいったん「うん」と応答し、永井の理解チェックを受け入れるが、0.6秒の間の後、09行目で「電気ってゆうか:,」という「てゆうか」の形式を用いることで、06行目の永井の理解チェックへの応答をやり直す。09, 12行目の長谷川のやり直しの応答から分かることは、それがガスコンロを使う機械であるということである。つまり、永井の理解チェック(「電気のやつですか?」)は誤っている。このことは、11行目でまみこが「電気じゃない」と、明確な否定形式を用いていることからも分かる。

では、なぜ長谷川は「電気じゃなくてガスコンロ」という直接的な訂正を用いていないのだろうか。考えられる理由の一つとして、次のことが挙げられる。09, 12行目の長谷川の発話は、「てゆうか」の後の「こうやってやって::」と産出する部分で、05行目と同様に、両手でパンを上下に挟むようなジェスチャーが伴っている。このことから、永井がホットサンドを作る機械についての知識を持っていない可能性があると長谷川が認識しており、その機械がどういうものかを永井に対して丁寧に説明することに長谷川が志向していると考えることができる。相手が何らかのことがらについての知識が無いかもしれないという文脈において、直接的な訂正を行うことはむしろリスクがあることであり、避けられる傾向がある(Schegloff, Jefferson & Sacks 1977)。直接的な訂正を避ける一つの方法として、たとえ相手の理解が間違っていたとしても、完全に間違っているわけではない「スタンス」を示すことは合理的であると言える。よ

ってこの断片は、相手の誤った理解チェックに対して弱い訂正を行う際に、「てゆうか」が用いられるケースであると分析できる。

次の(9)も同様のケースである。このデータは、フミヤとリエによる電話会話である。この会話が収録されたのは 1990 年代のことであり、まだパソコンの技術が今ほど進んでいなかったので、アメリカに在住する彼らがメールでやり取りする際は、基本的に英語で行うか、ローマ字で入力していた。そのような時代背景に基づいて考えると、01 行目のフミヤの報告は、リエにとってニュース価値のあるものだということが分かる。

(9) [Callfriend0921_00:55]

```
01  フミヤ:          俺最近あの:,E メールが,日本語であることわかったんよ.
02                   (0.8)
03  リエ:            <日本語>?
04  フミヤ:          >日本語でできるの.<
05                   (0.5)
06  リエ:            え,ひらがなで¿
07  フミヤ:          ↑うん
08  リエ:            [ええ?
09  フミヤ:          [いやひ-漢字カタカナひらがなで.
10  リエ:            fr<o>m your computer?
11  フミヤ:          うん
12                   (0.3)
13  フミヤ:          うん
14                   (0.7)
15  フミヤ:          or the one in my school h[h
16  リエ:                                      [日本の:,ワープロが入ってん↑の
17  フミヤ:    →     ワープロ>ってか<,Nemac(s)っていうい-普通の Emac じゃなく
18                   てね,
19  リエ:            うん
20  フミヤ:          Nemac(s)っていうプログラムで
21                   (0.4)
22  フミヤ:          日本語:をタイプして >あの<い>わゆる<まあ変↑換
23                   (0.2)
24  リエ:            >うんうんう[んうんうん<
```

25 フミヤ: [ワープロみたいな感じで.
26 リエ: [へ : : :]
27 フミヤ: [変換して送]れるんだって.

01 行目のフミヤの報告に対して、03 行目でリエが訝しげに「<日本語>?」と修復を開始し、その後 04 行目でフミヤが「>日本語でできるの.<」と修復を実行している。その後も、06 行目、10 行目で「E メールを日本語で送ることが出来る」ということについての修復が何度も開始されており、リエがこのことについて受け入れることに難しさを感じていることが読み取れる。そして 16 行目でリエは、01 行目のフミヤの発話に対しての一連の修復開始に続けて、「日本のワープロが入ってんの?」という理解チェックの修復開始を行う。それに対するフミヤの応答として産出されているのが、17 行目以降の発話である。まずフミヤは、リエが 16 行目の理解チェックで用いた「ワープロ」という言葉を繰り返し、「ってか（てゆうか)」を用いて、「ワープロ」を完全な誤りとしては扱わないが、別の選択肢に置き換えることを示している。その後、「ワープロ」という言葉を、「Nemacs っていうプログラムで日本語をタイプして変換する」という説明に置き換えている。このことから分かるのは、「E メールを日本語で送ることが出来る」ことの説明として、「日本のワープロが入っている」という単純な説明は誤りであり、そのプログラムの仕組みについて Nemacs という具体的な名称を用いながら説明する方が、より適切であることをフミヤが示しているということである。ただ、(8)と同様に「てゆうか」を用いることにより、E メールのプログラムについて相対的に知識が無いと思われるリエが提示した理解チェックの質問について、フミヤは完全な誤りとしては扱わず、弱い形の訂正を行っている。

これらのケースのように、他の参与者に何らかの誤解が生じていたり、理解の問題に直面している場合に、それを直接的に訂正することは多くの場合避けられることである(Schegloff, Jefferson, & Sacks, 1977)。直接的な訂正ではなく、相手の間違った理解チェックに対して丁寧に説明をすることは、受け手に寄り添った(affiliative)行為であると言えよう。そのような状況に対応する形で、相手の間違いを完全な誤りとして扱わないという「スタンス」（本来は完全な誤りであるが）を示しながら、丁寧に詳しい説明を与えるための資源として「てゆうか」が用いられていると考えることができる。

４．３．他の理解チェックへの応答との比較

最後に、4.1 および 4.2 で検討した「てゆうか」を用いた理解チェックへの応答とは異なるやり方と比較することで、理解チェックへの「てゆうか」を用いた応答の特徴づけをより明確なものにしたいと思う。特に注目したいのは、理解チェックの質問の特性が、「てゆうか」が用いられるケースとどのように異なるのかという点である。

(10) [Callfriend1684_10:35] ((マユミとキョウコによる電話会話。キョウコが、彼氏から 3 回目の別れ話を切り出されたことを語っている。彼氏の別れ話に対して、キョウコがどのように反応したのかを聞き手であるマユミが 01 行目で尋ねている))

```
01  マユミ:          なんてゆうと?(.) >それで.<
02  キョウコ:        それで今までは::,
03  マユミ:          うん
04                   (1.7)
05  キョウコ:        だから: (0.4) ↑今までは::, 別れた方がいいんじゃない?
06                   って(も/ま)っ t- 離れてたから::,
07  マユミ:          うん
08  キョウコ:        別れた方がいいじゃないって言ってたんだけど[::,
09  マユミ:                                                     [それキョウコ
10                   が言ってたの?
11  キョウコ:    →   いや向こうが.=
12  マユミ:          =向こうが↑ね
```

01 行目のマユミの質問へのキョウコの応答が、02 行目から開始されている。08 行目もその応答の一部であるが、「言ってたんだけど」の主語が明示的に述べられなかったので、マユミが 09, 10 行目でキョウコの語りを遮る形で、述べられなかった主語をトラブル源として理解チェックの質問を行っている。このとき、主語が誰であるかについて、マユミが自らの理解の候補として「キョウコ」を提示している。この質問の後に適切となるキョウコの応答は、マユミの理解チェックに確認を与えるか、もしくはそれを訂正するかである。11 行目を見てみると、「いや」という否定を示す言語形式を発話冒頭に配置し、「向こうが」というキョウコの彼氏を指示していることが理解可能となる表現を用いている。つまり、マユミによる「キョウコが主語である」という理解チェックを否定し、「彼氏（=向こう）が主語である」という正しい理解に置き換え、訂正している。その後、12 行目でマユミはキョウコの訂正を受け止めている。

この断片について、次の点を指摘したい。「いや向こうが.」という発話の組み立ては、相手の確認の求めを否定・訂正するという避けられるべき行為をしているにも関わらず、発話の遅延や言い淀み、発話形式の和らげや、説明の付加なども見られない（Schegloff, 2007: 63-73）。つまり、キョウコは直接的な形で相手の間違いを訂正していると言える。本来ならば、他者訂正がなされる際には、自信の強度を弱める標識を用いるなどして、他者訂正の調整が行われる (Schegloff, Jefferson, & Sacks, 1977: 378-381)。

ではなぜ「てゆうか」を伴う発話とは異なり、他者訂正が直接的な形で行われるのかと言う

と、少なくともこのケースにおいては、08 行目のキョウコの発話である「別れた方がいいじゃない」の動作主の候補が、キョウコかキョウコの恋人かの 2 つに 1 つしか無いということが理由として挙げられる。つまり、これまで検討したような「てゆうか」のケースでは、二者択一では無いような複雑な応答をしなければならなかったが、「いや」のみを伴う理解チェックに対する応答は、そのような複雑な応答をする必要が無い場合に用いられるということである。

このように、参与者たちが置かれている相互行為文脈や、選択される理解チェックへの応答の発話形式に応じて、様々なスタンスが実現される。理解チェックへの応答がどのような言語形式を伴って産出されるかだけでなく、どのような文脈的位置でなされるのかを詳しく観察することで、理解チェックへの応答という修復実行の 1 つのやり方の多様性について理解することが出来ると考えられる。

５．おわりに

本稿では、「てゆうか」が理解チェックの質問に対する応答に用いられるケースに注目し、分析を行った。まず、相手の理解チェックが是でも非でもない場合に、「てゆうか」を用いることで、理解チェックについて、話者が本来想定していたことではないが、それが間違ってはいないことを示しつつ応答することを明らかにした。次に、相手の理解チェックが誤っている場合でも、それに対して直接的な訂正をすることなく、相手に寄り添ったスタンスを示しつつ弱い訂正を行うために「てゆうか」が用いられていることを明らかにした。

今回の分析結果から示唆されることは、次の 2 点である。まず、修復実行の実践の多様性に迫る 1 つの試みとなる可能性があるという点である。修復についての研究は精力的に進められているが、他者修復開始と比べると、修復実行については明らかにされていないことが多い。修復実行に用いられる資源として、本稿では言語形式に注目したが、今後修復実行と共に用いられる様々な資源（視線やジェスチャーなど）との関係も明らかになるかもしれない。次に、理解チェックに対する応答の仕方の多様性である。これまでは、理解チェックに対してどのように肯定的応答をするのかという点については注目されたが（Kushida, 2011）、肯定以外の応答がどのようになされるのかについてはあまり注目されていない。本稿をきっかけとして、理解チェックに対する応答の諸相についてさらに多くのことを明らかにしていければと思う。

参考文献

Hayashi, M., Hosoda, Y., Morimoto, I. 2019. *Tte Yuu Ka* as a repair preface in Japanese. *Research on Language and Social Interaction*, 52:2, 104-123.

Heritage, J., 1984. A change-of-state token and aspects of its sequential placement. *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis*, 299–345.

Kushida, S., 2011. Confirming understanding and acknowledging assistance: managing trouble

responsibility in response to understanding check in Japanese talk-in-interaction. *Journal of Pragmatics*, 43, 2716–2739.

Laury, R., & Okamoto, S. 2011. *Teyuuka* and I mean as pragmatic parentheticals in Japanese and English. In R. Laury & R Suzuki (Eds.), *Subordination in Conversation: A Cross-linguistic Perspective*, 209-238.

MacWhinney, B., & Wagner, J. 2010. Transcribing, searching and data sharing: The CLAN software and the TalkBank data repository. Gesprachsforschung, 11, 154-173.

Schegloff, E.A., 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis I*. Cambridge University Press.

Schegloff, E.A., Jefferson, G., Sacks, H., 1977. The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language*, 53, 361–382.

Sidnell, J., 2010. *Conversation Analysis: An Introduction*. John Wiley & Sons.

串田秀也・平本毅・林誠. 2017.『会話分析入門』勁草書房.

小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香. 2022. 「『日本語日常会話コーパス』の設計と特徴」,『言語処理学会第 28 回年次大会発表論文集』, 2008-2012.

高木智世・森田笑. 2022.「問題性への志向を示すメタ相互行為的スタンス標識としての「まあ」」,『社会言語科学』24(2), 社会言語科学会, 67-82.

中馬隼人. 2019.「トラブルの責任の所在を示す相互行為プラクティス : 他者開始・自己実行の修復に用いられる「だから」を例に」,『語用論研究』21, 日本語用論学会, 78-99.

原田幸一. 2015.「若年層の日常会話における「トイウカ」の使用 : 縮約形「てか・つか」に注目して」,『日本語の研究』3, 日本語学会, 16−31.

林千賀. 2007.「「ってゆうか」は単なる意味のない前置き表現か : 意味の観点から」,『昭和女子大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』2, 37-49

マグロイン花岡直美. 2007.「文頭の「ていうか」とメタ言語否定」『言語学の諸相 赤塚紀子教授記念論文集』, 久野暲・牧野成一(編), 167-176, くろしお出版.

メイナード、泉子・K. 2004.『談話言語学』くろしお出版.

吉澤文. 2003.「ディスコース・マーカーとしての「っていうか」の機能の分析」,『日本語研究教育年報』7, 東京外国語大学, 39-63.

若松美紀子・細田由利. 2003.「相互行為・文法・予測可能性―「ていうか」の分析を例にして―」,『語用論研究』5, 日本語用論学会, 31-43.